

# ショウブ

牧 幸 男

端午の節句が近づき、日1日と新緑が深まる中で、5月晴れの空に泳ぐ鯉のぼりの姿は、季節のシンボルである。最近は鯉のぼりの使い方も、高速道路の吹流しか鯉のぼりに代わり、町や村起こしに子供が成長し使わなくなった鯉のぼりを集め何十匹、何百匹と川の上に吊るすなど様変わりしている。プロ野球の広島カープの応援団が、スタンドで大きな鯉のぼりを担ぎまわる姿もそのひとつかもしれない。

この鯉のぼりの歴史は、江戸時代に始まったと言われている。

文部省唱歌の「鯉のぼり」(作詞は不詳、作曲弘田龍太郎)の3番には、

百瀬の滝を登りなば、  
忽ち竜になりぬべき、  
わが身に似よや男子と、  
空に躍るや鯉のぼり。



と歌われている。出典は、中国二十四史の一つ『後漢書』(編者：范曄<sup>はんよう</sup>398～445)による。その内容は、「黄河の急流にある龍門に集まる鯉のうち、この急流をもし登ることができれば龍に化する。」の記述があり、出世の糸口をつかむ意味となり「登竜門」と言う言葉が生まれた。それが「男子の成長と出世を願う」意味になり、鯉のぼりが「子どもが健康に育ち、大きく出世して欲しい思いと、神様にわが子をお守りください」との願いを託す姿になったのである。

前置きが長くなってしまったが、端午の節句のスタートは中国の六朝時代(3～6世紀)の5月5日頃、雑薬(ヨモギやショウブなど香りのある薬草)を摘み、家の入り口に掛けたり、ショウブを酒に浸して飲んだ「辟邪防病」<sup>へまじや</sup>の行事からとされている。わが国では仁徳天皇の39年(351)に5月の始めにショウブを飾った記録があり、端午の節句とショウブの関係は、鯉のぼり以上に古いことが分かる。『万葉集』(629～759)にはアヤメグサの名前で11首掲載されているように、日本人にはなじみ深い植物である。清少納言は『枕草子』(1004～1012)の第39段で「節は5月にしく月はなし。菖蒲・蓬<sup>そうぶ</sup>などのかおりあひたる、いみじうをかし。・・・若き人々菖蒲のさしぐしさし、物忌みつけなどして、・・・」と記述し、ショウブが古代中国の邪気を祓う薬草であることを良く知っていた。更に、菖蒲の扁平な葉が剣に似て、語呂が「勝負」に通じることから「尚武」に通じ、男の節句にふさわしい植物になったのである。

ショウブは、日本全土に生育しているサトイモ科の多年生草本で、根茎は大きく白、しばしば赤みを帯びることがある。良い香りがする葉は明るい緑色でなめらかで、根茎から直立し高さ80 cmぐらい、幅1~2 cm程、先端は狭形で尖っている。花径は細く初夏に無柄の目立たない5 cm程の肉穂花序で淡黄色の花をつける。中国産の菖蒲は、大きさ1.2~2.5 cmの長楕円形の液果を結ぶが、日本産は3倍体のため果実を結ばない。

「いずれがショウブかカキツバタ」と言われるが、ショウブとアヤメ、カキツバタは見分けにくい植物の代表として知られている。生態的には、科名の違いと生育環境で区別できる。乾燥地帯に生えるのがアヤメ（アヤメ科）、水中や湿地地帯に生えるのがカキツバタ（アヤメ科）、この中間帯に生育するのがショウブ（サトイモ科）である。

私達のショウブの思い出は、もっぱら菖蒲湯に浴った時ショウブの香りを嗅いだり、噛んだりしたことではないだろうか。古くから知られていた植物だけに詩歌の対象になってきた。

ほととぎす 今来鳴き初む あやめぐさ かつらくまでに 離るる日あらめや 大半 家持  
菖蒲湯の 香のしみし手の 厨くりやごと 中村 汀女

名前由来は「菖蒲に基づいたものだが、もともと菖蒲はセキショウの漢名なのである。古くアヤメ又はアヤメ草と言ったのは本種のこと、これは文理又は文目、つまりあやのある模様の意味で、葉がたくさん並び集まってあや目を描きだしていることからこう言われている。また葉に縦の線と模様とが平行に通っているからだと言うが疑問である。漢名は白菖である。」と牧野富太郎博士は述べている。植物名の変化は、深江輔仁著『本草和名』（918）には「昌蒲・一名昌・一名菖蒲……和名阿也女久佐」とあり、菖蒲せきしょうと白菖しょうぶを同一にしたのが原因とされている。別名は白菖びやくしょう、軒草あやめぐさ、軒文目のきあやめ、鬼石菖等がある。学名は *Acorus calamus* で、属名は飾りのない意で花が美しくないから、種小名は管の意で肉穂花序が円柱状であることによっている。

生薬名は菖蒲根、中国最古の『神農本草経』（250~280頃編纂）の上品に記載されている古い生薬である。5月と12月採取した根茎を日陰で乾燥し、粉末や煎じて芳香性健胃薬や浴用剤に利用してきた。わが国でも、鎮痛、健胃、駆虫、便秘等に利用するが、妊婦には禁忌とされている。また、生の葉を用いる菖蒲湯は、古来より神経痛や腺病質の子供に利用してきた。利用には葉、茎、根をだまかに刻んで布袋に入れ煮だした物をふろに入れる方法もある。

花言葉は「あなたを信じます」「優しい心」「忍耐」「諦め」です。

